

MEGUMI KITAHARA

「日本」画家、谷口富美枝（1910-2001）：彼女にとって「越境」とは何か？  
““Japanese” Artist, TANIGUCHI Fumie (1910-2001) : What is “Trans-” for Her?”

Abstract:

谷口富美枝は、1930年代、そのモダンな女性像によって画壇の注目を浴びた女性日本画家である。第二次世界大戦中は、国策団体の女流美術家奉公隊のなかで、日本画部門のリーダーとなったが、敗戦後は、新たな活動の場を求めて1955年に渡米した。そして2001年にロサンゼルスで没するまで、人生の半分以上をアメリカで過ごすことになる。

渡米後の谷口の作品はほとんど残されておらず、記録もない。その代わりに谷口は、戦前の画壇での活躍や結婚・出産、あるいは、渡米後、ロサンゼルスの縫製工場で働く自分の人生について、小説や随筆の形で何度も文章化し、日系アメリカ人の同人誌『南加文芸』に投稿した。彼女が小説を発表した1960年代から70年代は、アメリカでは、オノ・ヨーコや草間彌生、出光真子らが、自分の表現活動に邁進していた時期でもある。

本発表では、日系社会においても家父長制社会の視線に晒された谷口富美枝にとっての”Trans.”とは何だったのかを、考察する。(400字)

Representative works:

北原恵、美術批評「アート・アクティヴィズム」(1994年から連載)

北原恵、『攪乱分子@境界：アート・アクティヴィズム II』インパクト出版会、2000年

北原恵編著『アジアの女性身体はいかに描かれたか—視覚表象と戦争の記憶』（日本学叢書4）、青弓社、2013年

<http://www.genderart.jp/>